

二 山ごぼう

むかしむかし、椎葉しいばのきやあのき坂さかには、「山ごぼう」という子どものかみさまがすんでおった。しかし、めったに見たものはおらん。ことし七つになるリキも、じいさまやばあさまから「山ごぼう」のはなしをきいたことはあるが、見たことはなかった。

リキはやんちゃぼうずで、まい日、山をはしりまわって、どろんこになってあそんでいた。かあちゃんは、

「リキ、くらくなるまえにもどってこい。よるに子どもが一人ひとりでおると、たぬきにばかされて、うちにかえれんようになるぞ。」

と、口をすっぱくしていっておった。でも、あそびがおもしろくてたまらないリキにとっては、かあちゃんのことばさえ、耳には入らなかつた。まい日くらくなつてからいえにもどつては、とうちゃんやかあちゃんにしかられていた。

ある日、リキはヤマネを見つけた。このあたりでも、ヤマネを見かけるのはめずらしい。リキは、むちゅうでおいかけた。ふと気がつくど、見たことのないところにきていた。

ヤマネをおいかけて、ずいぶん山おくまできてしまったらしい。

「なあに、たいしたことないさ。いつもはしりまわっているところから、ちよつと入りこんだだけだよ。すぐにかえれるさ。」

リキは、木いちごや野いちごをとってたべた。おなががいっぱいになってすこしねむくなったので、木のみきによりかかってひとねむりした。



目がさめて、リキはおどろいた。あたりはまっくらになってしまっている。こんな山おくから、まっくらな山みちを一人であるいてかえられるはずはない。かあちゃんの「たぬきにばかされて、かえれんようになるぞ。」というこ
とばをおもい出して、リキは、大ごえでないた。
なきごえが山々にこだまして、ますますこわく
なった。

とつぜん、

「おまえ、みちにまよったんか。」とこえをかけられて、リキはとび上がるほどおどろいた。それは、ちょうどリキとおなじとしほどの子どもだった。リキは、こわごわたずねた。

「いったいおまえはだれなんだ。たぬきがばけとるんとちがうか。」
その子は、リキのことはこたえず、



「うちにかえりたいのやろう。だったら、はようついてこいや。」といって、あるき出した。リキは、あわててその子についていった。しばらくいくと、見なれたばしょに出てきた。ここからならいえもすぐちかくだ。リキはおもわずかけ出した。

「かあちゃーん。かあちゃーん。」

リキはなきながらはしった。

「こんどまよっても、もうたすけてやんねえぞ。」

というこえに、はつとしてうしろをふりかえったが、その子のすがたはどこにもなかった。リキは、

「あれが山ごぼうかもしれん。」

とおもった。

それから、リキはくらくなるまえにうちにかえるようになった。

